

政府 高速炉ありき

12/4
福中

実証炉 国内に建設へ

もんじゅ反省十分踏まえぬ

政府は、廃炉を前提に見直し議論が進む高速増殖炉もんじゅ(敦賀市)の後継となる高速炉の実証炉を国内に建設することを目標に、開発方針を具体化する工程表の策定に来年から取り組む方針を示した。巨額の国費をつぎ込みながらトラブル続きだったもんじゅの反省や検証を十分に踏まえることなく、高速炉開発ありきで核燃料サイクル政策の延命が続く。
【28面に関連記事】

政府が検討する
高速炉開発の今後のイメージ

2016年12月	政府が高速増殖炉もんじゅの取り扱い、後継高速炉の開発方針を正式決定
17年初頭	高速炉開発方針の工程表策定に着手
18年めど	10年程度の開発作業を取りまとめた工程表策定
?	海外協力を活用し、国内で実証炉建設を目指す

本県重視の姿勢強調

●「つまずき」

「国内に開発の実力を備えておく」。政府が11月30日に開いた高速炉開発会議で、主催の世耕弘成経済産業相は、海外協力を活用して高速炉開発を進める考えを強調した。開発4段階のうち、2段階目である原型炉もんじゅの次の段階となる実証炉の建設を目指す方針を打ち出した。作業部会を設置し、2018年をめどに10年程度を見据えた作業工程をつくる。

もんじゅは、初期段階の実験炉「常陽」(茨城県)の次のステップとして、発電性能を試験する役割を担ってきた。だが、1995年にナトリウム漏えい事故が発生するなどトラブルが相次いだ。1兆円超が投じられながら、250日しか運転できず100%出力を一度も達成できてい

ない。

原型炉でつまずいたにもかかわらず、政府は、実証炉の設計開発に着手できる技術がある」と結論付け、もんじゅを再稼働しなくてもフランスと共同開発する高速炉実証炉「ASTRID(アストリッド)」や常陽で、もんじゅを再稼働させる場合とほぼ同様の技術的な知見を得られるとした。だがアストリッドは設計段階で実用化の見通しは立っておらず、費用負担も不明。ある経産省幹部は「アストリッドが駄目なら(海外協力の)看板を返上して国内で開発を

● 固執

「固執」
政府は当初、原発から出る使用済み燃料を再処理してプルトニウムを取り出す「核燃料サイクル政策」の中核施設の一つにももんじゅを位置付けていた。

もんじゅの廃炉が現実な情勢となってもなお、政府が高速炉開発とサイクルに固執する背景には、核不拡散の観点から影響しているとみられる。核兵器の材料となる余剰プルトニウムの保有に懸念を抱く

続ければよい」と話すが、国内開発が成功する確証はない。

国際社会からの批判をかわしたとの思惑が見え隠れする。今後の高速炉開発は、もんじゅなどで得た国内の技術や人材の活用も掲げ、政府はサイクルの重要拠点を担ってきた福井県を重視する姿勢を強調。だが、敦賀市の洲上隆信市長は「(政府案は)具体的なものが見えない。地元としてどのように受け止めていくか分からない」と困惑する。

もんじゅ廃炉後の解体作業と並行して技術研究を継続することを模索したり、福井県内に研究用原子炉を新設したりする方向で調整している。

た。

検証走行試験は、実用化に向けて来年6月ごろの再開を目指している耐久走行試験の前掲。来年3月までレール幅の異なる九州新幹線熊本車両代で約1万キロを走らせ、車軸が摩耗しないよう改良した部品の効果を確認する。

FGTは軌間交換をしながら計60万キロを走らせる耐久走行試験が2014年10月に始まったが、車軸付近にひびや摩耗が見つかり、直後に中断。改善策が講じられてきた。